

# 「礼」から見直した丙子胡乱

許泰玖 (韓国カトリック大学校)

## 発表要旨

この論文は、丙子胡乱の前後の朝鮮の対応を「礼の実践」という観点から再検討した研究である。

清は、南漢山城を包囲して以来、自国の戦力を続々と強化するにつれて、朝鮮に対する圧迫も次第に強めた。主和派の主張どおり、清の要求を受け入れない限り、朝鮮という国家が維持できる方法はなかった。南漢山城に籠城する際、講和交渉の争点となったのは、領土の割譲や戦争賠償金などの問題ではなく、国書の形式や降伏の手順であった。清は、称臣を表記した国書、仁宗の出城降服、斥和派の圧送を朝鮮に執拗に要求した。

当時、講和交渉に臨んでいた朝鮮の君臣が最後まで悩んでいた問題は、降伏の問題より、礼によって具現される降伏の形式であった。大多数の朝鮮人からみると、対明義理という大義と称臣を表記した国書の形式は、決して分けられない要素であったからである。したがって、斥和派は戦況が確かに清側に傾いている状況の中でも、対明義理の固守を掲げて最後まで降伏を拒んだ。彼らが憂慮したのは、明の間罪や報復ではなく、対明義理の放棄が意味する道徳と文明の崩壊、そして天下と後世の評価であった。

## 略歴

〈許泰玖/ Huh, Tae-koo〉

1970年、ソウル生まれ。ソウル大学校国史学科で学士、碩士、博士学位を取る。

碩士学位論文の題目は「17世紀 朝鮮의 焰硝貿易과 火器製造法 發達」であり、博士学位論文の題目は『丙子胡乱의 政治・軍事史的 研究』である。ソウル大学校奎章閣韓国学研究院の学芸研究士を経て、現在は韓国のカトリック大学校人文学部国史学専攻の助教授として在職している。主な研究分野は、中華主義と関わる朝鮮後期の政治史、外交史、思想史である。発表した論文としては、「丁卯・丙子胡乱 前後 主和・斥和論 關聯 研究의 成果와 展望」、「이나마 이와키치(稻葉岩吉)의 丁卯・丙子胡乱 關聯 主要 研究 檢討」、「丙子胡乱 理解의 새로운 視角과 展望-胡乱期 斥和論의 性格과 그에 대한 脈絡的 理解-」などがある。